

第三章 戦国～後漢時代の中国医学

〔B C 四七五年～A D 三三〇年〕



黃帝素問靈樞經卷之一
 ○九鍼十二原第一 法天
 黃帝問於岐伯曰余子萬民養百姓而收其
 租稅余哀其不給而屬有疾病余欲勿使被
 毒藥無用砭石欲以微鍼通其經脈調其血
 氣營其逆順出入之會令可傳於後世必明
 寫之法令終而不滅久而不絕易用難忘為
 之經紀其章別其長要第之終始令各有
 一經紀其章別其長要第之終始令各有

第三章 戦国・後漢時代の中国医学

(BC四七五年～AD二二〇年)

第一節 医薬帛書と簡牘

一、馬王堆の医薬帛書

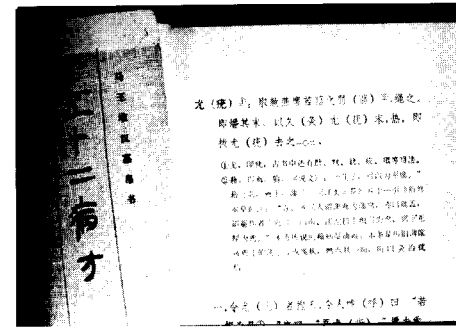
一九七三年末、湖南省長沙の馬王堆三号漢墳より、大量の医薬に関する帛書(絹の布に書かれた文書)が出土した。そのなかには、『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経(甲本)』『陰陽十一脈灸経(乙本)』『脈法』『陰陽脈死候』『五十二病方』『却殺食氣』『導引図』『養生方』『雜療法』『胎產書』などが含まれている。

考証の結果、これらの帛書はみな漢の文帝十二年(BC一六八年)に埋葬されたものであるが、それぞれの帛書が編纂された時期はさまざまであることが判明した。また最も古いものは、春秋時代に、最も後のものは、戦国時代末期から秦・漢代にかけて書かれたものであることも解明されたのである。

これらの出土品は、中国医学史上の空白部を埋めるに足る資料であるばかりでなく、前漢時代以前の中医薬学を研究するうえで、きわめて価値の高い、貴重な資料である。

(一) 『五十二病方』

『五十二病方』は、文字数にして漢字で千五百余字ある文書で、中国に現存する最古の医学書である。同書には、現在もなお用いられている病名百余種、処方（薬方）二百八十余种、薬物二百四十余种が掲げられている。『五十二病方』に記載されている病名は、前漢時代以前の記録において、すでに内科・外科・婦人科・小児科および目・耳・鼻・口・舌の五官科におよんでいる。なかでも、外科疾患に関する記述が多く、各種の外傷・動物による咬傷・癰疽（悪性のできもの）・潰爛（ただれて形がくずれている症状）・腫瘤（はれもの・しこり）・皮膚病・痔疾などがとり上げられている。また内科疾患でとり上げられているのは、癰瘤・瘰癧（ひきつけ）・瘧疾（マラリヤ様の熱性病）・食病（消化器系の疾患）・癰病（脊椎彎曲）・淋病・寄生虫病など、小児科疾患では、癰瘤・瘰癧（ひきつけ）などであった。このほかにも、産婦人科疾患・眼病などが記されている。これらの記述中には、症状・病態を把握する方法において、今日の目からみても、かなり高い水準に達している例が含まれている。



五十二病方 条、前漢時代に書かれたもので帛書（はくしょ・絹の布に記された文書）に52の病名が掲げられている。黄帝内経より古い時代に著されたもので、中国最古の医方である。この書物の中には、灸法、砭法はあるが鍼法は見当たらない。

治療面に関する記述を紹介すると、まず薬物療法について、本書『五十二病方』で採用している処方の大部分は、二味薬以上で配合される「複方」と称せられるもので占められている。例えば、疽病（悪性のはれもの）の薬方のひとつとして、白斂（ビヤクレン）・黄耆（オウギ）・芍薬・桂（ケイ）、姜（ショウガ）・椒（サンショウ）・茱萸（カワハジカミ）の七味薬の組成が掲げられている。そして、

例えば同じ疽病であっても、疾病のタイプの違いによって主薬の分量を加減するといった処方も行われていた。例えば、「骨疽」では、白斂を倍量とし、「肉疽」では、黄耆を倍に、「腎疽」では、芍薬を倍にする、と指示している。この発想は、まさしく、後世の弁証論治のさがけをなすものであるといえよう。

また、同書のなかには、上記のような内服薬の処方以外に、外治法についても、豊富な内容が記されている。例えば手術・薬剤の貼付・薬草風呂・煙蒸（酒や煙で気を上昇・発散させる）・熨法（温罨法）・砭石・灸法・按摩・角法（獸角を用いた吸角法）などがそれである。そして、例えば痔核の手術について、焼灼結紮術（結紮とは患部を縫合その他の方法で止血すること）や結紮摘除術・瘻孔（組織の管状欠損）切除術など、多種の方法を紹介している。さらに外傷の傷口からの感染に対する消毒と治療に、アルコールとしての酒が応用されているし、疥癬（疥癬虫による伝染性皮膚病）の治療に、この時代すでに雄黄（二硫化砒素）や水銀などの消毒薬が用いられていたことなども記されている。この記述は、十二世紀になってイタリヤの著名な外科医ロジェル（Roger）が、水銀軟膏を消毒剤として利用した症例の、実に千年あまり前にあたる。

薬方の剤形については、同書に明確に記述されているのは丸薬だけであるが、実際には、この時代すでに湯薬・散薬・膏薬などが存在していた。それを証拠だてるものとして、薬剤の煎じ方・服用時間・服用回数・禁忌症などについて、かなりの説明があることは注目すべきである。

本書『五十二病方』に掲げられている薬物は前述のごとく二百四十余种ある。その内訳は植物薬が主で、動物薬がこれに次ぎ、一番少ないのが鉱物薬である。そして、その中の多くの薬物について、その効能と適応症を解説する記述が添えられているが、その説明が後世の医薬文献や、臨床経験とよく合致していることも注目に値する。『五十二病方』ではまた、薬物の採集方法・貯蔵方法についてもふれられており、全体として、前漢時代以前の中医学の発展状況をよく反映した貴重な書物であるといえよう。